HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『元朝秘史』モンゴル語における人称代名詞属格形：ハムニガン・モンゴル語の 譲渡可能性との関連から
Author(s)	山越, 康裕
Citation	北方言語研究, 4, 65-84
Issue Date	2014
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55120
Type	bulletin (article)
File Information	nls-4-06.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 4:65-84（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2014）

『元朝秘史』モンゴル語における人称代名詞属格形：ハムニガン・モンゴル語の譲渡可能性との関連から

山 越　康 裕
（札幌学院大学）

0. はじめに

本稿では、中期モンゴル語における人称代名詞属格形が「所有者」として他の名詞（＝被所有者）と名詞句を構成するケースにおいて、属格形先行型と属格形後行型とのあいだにどのような差異がみられるのか、とくに譲渡可能性の観点から分析を試みる。

山越 (2010)、Yamakoshi (2012) は、ハムニガン・モンゴル語、シネヘン・ブリヤート語、モンゴル語ハルハ方言の所有構造について同様の分析をおこなった。その結果ハムニガン・モンゴル語においては、所有人称小詞が後接する場合は、被所有者が所有者にとって譲渡不可能な存在であること、こうした使いわけがツングース語族・エヴェンキ語の一方言であるハムニガン・エヴェンキ語の影響によるものだということを指摘した。しかしながら、山越 (2010: 113) で述べたように、ハムニガン・エヴェンキ語の影響により、a. ハムニガン・モンゴル語にのみ譲渡可能性による形式の使いわけが生じたのか、b. 古い時代のモンゴル語に譲渡可能性による使いわけが存在し、ハムニガン・モンゴル語にのみその使いわけが残ったのか、通時的観点からの分析をおこなう必要がある。そこで本稿では中期モンゴル語 (Middle Mongolian; 13～15 世紀初頭のモンゴル語 (Rybatzki 2003: 57)) のテキストとして四部叢刊影印本『元朝秘史』（以下、『秘史』）を用いて、所有をあらわす構造の差異と譲渡可能性との関係を分析する。結論として、『元朝秘史』が著された中期モンゴル語（以下、『秘史』モンゴル語）においては、所有人称小詞の有無によって譲渡不可能／可能を区別する現在のハムニガン・モンゴル語のような使いわけは確認されないこと、ただしハムニガン・モンゴル語の所有人称小詞に対応する代名詞属格形後行型は譲渡不可能物に対して用いられやすい傾向があること、ハムニガン・モンゴル語の所有人称小詞の有無による譲渡不可能／可能の区別は、エヴェンキ語の影響を受けた結果、より強化された用法だと推測されることを指摘する。

1. ハムニガン・モンゴル語の所有構造

北米の諸言語を中心に所有構造と譲渡可能性の関係について論じた Nichols (1988) の “Head-marking / Dependent-marking” に沿い、Yamakoshi (2012) はモンゴル諸語のうち、とくに北部に分布するハムニガン・モンゴル語、シネヘン・ブリヤート語、モンゴル語ハルハ方言の所有構造について分析をおこなった。この 3 言語には、所有者 [D(ependent)] と被所有者 [H(ead)] の関係を示す名詞句の構造として以下 3 つのタイプ（モンゴル語ハルハ方言は 2 タイプ）がある。1) 所有者名詞属格形 (D-GEN) が被所有者名詞 (H) に先行する従属部標示型（以下、D 型） [D-GEN#H]、2) 所有者名詞があらわれずに被所有者名詞 (H) に所

有人称小詞 (=POSS) が後接する主要部標示／従属部欠落型（以下、H' 型）[H=POSS][1]、3) 所有者名詞属格形 (D-GEN) が被所有者名詞 (H) に先行し、かつ被所有者名詞に所有人称小詞 (=POSS) が後接する二重標示型（以下、DH 型） [D-GEN#H=POSS]。モンゴル語ハルハ方言は 3 つ目の DH 型を欠く[2]が、ハムニガン・モンゴル語とシネヘン・ブリヤート語には 3 タイプがすべて確認される (山越 2010, Yamakoshi 2012)。参考のためハムニガン・モンゴル語における D 型、H' 型、DH 型の 3 構造の例をそれぞれ示す (1)。

(1) *KhM.* a. D 型

minii dəbtər
1SG:**GEN** ノート
「私のノート」

b. DH 型

minii akaa=**mini**
1SG:**GEN** 兄=**1SG:POSS**
「私の兄」

c. H' 型

tarikin=**mini**
頭=**1SG:POSS**
「私の頭」

（山越 2010: 106）

Yamakoshi (2012) は、これらの構造がどのように用いられているのか、テキスト (山越 2006, 2007 etc.) から用例を抽出、分析した。その結果、ハムニガン・モンゴル語については以下のような特徴があることを指摘した。

1) 所有人称小詞を伴わない D 型の使用頻度が低く、所有人称小詞を伴う H' 型、DH 型がおもに用いられる (Yamakoshi 2012: 278)
2) 使用頻度の低い D 型における被所有者は「譲渡可能物」に限られ、H' 型、DH 型の被所有者のほうが角田 (1992: 119), Tsunoda (1995: 576) が提案する「所有傾斜 (possession cline)」において上位に位置する語彙（身体部位、身体属性、衣服、親族名称）＝「譲渡不可能物」であることが多い (Yamakoshi 2012: 278)
3) とくに所有者が人である場合、H' 型、DH 型の被所有者は「譲渡不可能物」に限定される。つまりこの場合、所有人称小詞が後行するのは「譲渡不可能物」に限られる (Yamakoshi 2012: 279)
4) 所有者が人である場合に譲渡可能／不可能が関与するという 3) の特徴は、Sunik (1947), 風間 (2001) らが指摘するエヴェンキ語などツングース諸語の譲渡可能接辞の用法と共通する (Yamakoshi 2012: 282)

上記のように、ハムニガン・モンゴル語が「被所有者に所有人称小詞が後接するか否か」によって譲渡不可能／可能を区別する一方で、モンゴル語ハルハ方言やシネヘン・ブリヤート語にはこのような形式上の区別は確認されず、またハムニガン・モンゴル語に比べる

[1] Nichols (1988) の示す主要部標示型は、所有者 (D) が無標であらわれ、被所有者 (H) が有標となる。たとえばエヴェンキ語では ollomimni#dʲaw-in [漁師#ボート-3SG:POSS] のようにこれに該当する例があるが、ハムニガン・モンゴル語やモンゴル語ハルハ方言、本稿で扱う『秘史』モンゴル語では被所有者に所有人称小詞が後行した場合に所有者が無標であらわれる例 [D#H=POSS] はない。つまり Nichols (1988) の示すタイプと形式が異なることから、山越 (2010), Yamakoshi (2012) ではこれを H' 型と定義した。

[2] činii#nom#čin' [2SG:GEN#本#2SG:POSS] のように見かけ上は DH 型をなす形式がモンゴル語ハルハ方言にもある。しかしながらこのようなケースでは所有人称小詞が「所有」をあらわしておらず、情報構造にかかわるマーカーとみなされることから、Yamakoshi (2012) ではこれを D 型として扱った。

と後者 2 言語での所有人称小詞の出現頻度は低い。このことから Yamakoshi (2012) は、上記 1) ～4) の特徴がハムニガン・モンゴル語話者のもう一つの母語であるハムニガン・エヴェンキ語との相互影響によるものだと指摘した。ただしこうした使いわけがエヴェンキ語の影響により新たに生じたのか、もしくは古い時代のモンゴル語にも同様の使いわけがあり、エヴェンキ語の影響下にあったハムニガン・モンゴル語にのみその使いわけが保持されたのかについては未検証であった。

なおかつ、中期モンゴル語以降周辺のモンゴル諸語に起こったような変化がハムニガン・モンゴル語には見られず、中期モンゴル語の特徴を残しているということが Janhunen (2003) によって指摘されている。

> Khamnigan Mongol is characterized by a unique property, in that it is the single most conservative Mongolic language spoken today. Khamnigan Mongol simply lacks almost all the innovations that have affected its neighbours since Middle Mongol times. With some exaggeration, Khamnigan Mongol could therefore be considered a residual form of Middle Mongol. The distance to Proto-Mongolic is only slightly longer. (Janhunen 2003: 85)

そこで、ウイグル式モンゴル文字によって 13 世紀に著された原典を漢字音写した四部叢刊影印本『元朝秘史』テキストを対象に、譲渡可能性に関する使いわけがあるのか否か、その所有構造を分析していく。

2. 対象とする中期モンゴル語テキスト

上述の通り本稿では四部叢刊影印本『元朝秘史』を対象テキストとする。これは 13 世紀のモンゴル語を 14 世紀末の漢語で音写したものとする見解が有力である (e.g. 小林 1954: 223, 小澤 1994: 226)[3]。

『秘史』は漢字で音写されたモンゴル語文の右側に、漢語で傍訳（逐語訳）が付されている。『秘史』に関してはこれまで数多くのローマ字転写テキストも著されている (cf. 栗林・確精扎布編 2001: i)。本稿はこのうち、Ligeti (1971) によるローマ字転写テキストをもとに形態素分析をおこない、索引を付した栗林・確精扎布編 (2001) を用いる[4]。参考のため漢字音写・漢語傍訳・ローマ字転写・グロス・訳をすべて付した例文を (2) に示す。ただし (3) 以降は漢字音写・漢語傍訳を省略して表記する。

---

[3] 『秘史』のもととなったウイグル式モンゴル文字による原典の成立年代には諸説あるが、小澤 (1994: 94, 125) は 13 世紀にモンゴル語東部方言によって書かれたと推定している。他の研究者もおおむね 13 世紀～14 世紀初頭という主張をなしており、Rybatzki (2003) らが定義する中期モンゴル語の時代に合致する。

[4] 用例に付した番号 [§a. bb:cc:dd] は、『秘史』の節番号（第 a 節）および栗林・確精扎布編 (2001) のレコードとして付されている番号 [巻 bb:丁 cc:行 dd] に対応する。例文が 2 行以上にわたる場合は [§1. 01:01:01-02]、2 丁にわたる場合は [§1. 01:01:10-02:01] のように示す。なお『秘史』や Ligeti (1971) は文の切れ目を示していないため、「文」の区切りも栗林・確精扎布編 (2001) に準ずる。ただし栗林・確精扎布編 (ibid.) は形態素境界に用いる記号が一般的なもの（e.g. Leipzig Glossing Rules）とは異なるため、原則 Leipzig Glossing Rules に即した形で形態素境界を改めた。和訳は小澤訳 (1997a, b) に基づき、小澤訳 (1997a) からの引用は （上: xx）、小澤訳 (1997b) からの引用は （下: xx）と和訳末尾に引用ページを示す。グロスは筆者による。

(2) 塔不兀剌 塔奔 出黒台 木速傷 古兀列勒敦 把舌里周 必禿温周
五箇 五 束的 箭幹 毎人 拿着 輪着
tabu'ula tabun čuqtai müsüt gü'üleldü-n bari-ǰu bitü'ül-ǰü
五人で 五つ 束持ちの 矢柄 奪い合う-CVB.MOD 握る-CVB.IPFV 順に行う-CVB.IPFV
中忽中忽侖 牙答罷
折折 不能了
ququl-u-n yada-ba.
折る-E-CVB.MOD できない-PST

「五人一緒になって、五本束の矢柄を握ったが、それぞれ折ることは出来なかった（上: 20）」 [§19. 01:12:02-03]

3. 『秘史』モンゴル語の所有構造のパターン

『秘史』モンゴル語の代名詞属格形には、属格形に -ai~ -ei「～のもの」が接続して「私のもの」のような意味をあらわす「物主代名詞」を含め、表 1 の 10 形式が確認される。

表 1. 『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形および物主代名詞[5]

	SG	PL		SG.PP	PL.PP	
1st	min-u	man-u (EXCL)	bidan-u (INCL)	min-u'ai	man-u'ai (EXCL)	bidan-u'ai (INCL)
2nd	čin-u	tan-u		—	—	
3rd	in-u	an-u		—	—	

中期モンゴル語では、所有者 (D) と被所有者 (H) の関係は、A) D の属格形が H に先行する属格形先行型（以下、先行型）[D-GEN#H] = (3)、B) D の属格形が H に後行する属格形後行型（以下、後行型。人称代名詞の場合のみで、普通名詞属格形は全て先行型）[H#D(PRN)-GEN] = (4)、C) D の属格形が H に先行し、H のあとにさらに人称代名詞属格形が後行する二重型（D＝普通名詞のみ）[D-GEN#H#PRN-GEN] = (5) の 3 形式のいずれかであらわされる。該当箇所を太字で示す。

(3) A) 先行型 [D-GEN#H]
min-u ***ulus*** Altan Qučar qoyar ken-e ber ülü mede'ül-kün
1SG-GEN **民人** PSN PSN 二 誰-LOC も NEG 知らせる-VN.FUT.PL
büy-yü ǰe.
COP-DED.PRS MDL

[5] 中期モンゴル語では 2, 3 人称にも物主代名詞があったと推測されるが、『秘史』には 2, 3 人称の物主代名詞が用いられた例が確認されない。ちなみに、『秘史』モンゴル語の 1 人称複数包括形 bidan-u の後行型に対応する所有人称小詞は現代のモンゴル諸語には存在しない。さらに 3 人称単数／複数属格形後行型の区別は現代のモンゴル諸語では失われており、Yamakoshi (2012) が対象とした 3 言語では 3 人称単数／複数属格形先行型に由来する形式も失われ、D 型の所有者は遠称指示代名詞属格形が補充的に用いられている。

「わが民人はアルタン、クチャル二人のいずれにても治めさせまじきものぞ（上: 238）」[§180. 06:38:10-39:01]

(4) B) 後行型 [H#D(PRN)-GEN]

edö'e ene šingqor atqu-ǰu abčira-ǰu ***qar-tur*** ***min-u***
今 この 海青 つかむ-CVB.IPFV 持ってくる-CVB.IPFV **手-DAT** **1SG-GEN**
tu'u-ba.
留まる-PST

「今、この海青（おおたか）の掴みもち来たりて、わが手にとまれり（上: 39）」[§63. 01:43:08-09]

(5) C) 二重型 [D-GEN#H#PRN-GEN]

Otčigin ***Teb_tenggeri-yin*** ***ǰaqa*** ***in-u*** bari-ǰu....
PSN **PSN-GEN** **襟** **3SG-GEN** 掴む-CVB.IPFV

「オドチギンは、テブ・テンゲリの襟を掴み...（下: 146）」[§245. 10:38:06-07]

現在のモンゴル諸語にみられる付属語的な所有者標識（ハムニガン・モンゴル語でいう所有人称小詞）は、上記 B), C) にあらわれる人称代名詞属格形の後行型が文法化・付属語化したものだとする見方が一般的である (e.g. 一ノ瀬 1988: 17, Rybatzki 2003: 71-72)。『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形を対象とする代表的な先行研究である一ノ瀬 (1988) は、それまでの先行研究を通観したうえで、図 1 のような推測をおこなっている。太字にした語形が『秘史』で用いられる。

*minugai >①**minu'ai** > minī（人称代名詞属格形 [1] ）

②（語に前置）**minu**#H > mini（人称代名詞属格形 [2] ）

***minu**

③（語に後置）H#**minu** > mini > min（所有人称小詞）

図 1. 一ノ瀬 (1988: 21) による推測（1 人称単数属格形・物主代名詞の例。一部改変）

つまり、『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形のうち、人称代名詞属格形に -ai ~ -ei「～のもの」が接続した「物主代名詞」(= 図 1. ①) および (3) A) 先行型の D-GEN# としてあらわれる形式 (= 図 1. ②) が現代モンゴル語諸方言の人称代名詞属格形に、(4) B) 後行型の #D(PRN)-GEN , (5) C) 二重型の #PRN-GEN としてあらわれる形式（図 1. ③）が所有人称小詞（一ノ瀬 1988 の用語では「人称関係小辞」）になったとする仮説である[6]。

この一ノ瀬 (1988) の仮説に従えば、A) 先行型 [D(PRN)-GEN#H]」= (3) が Yamakoshi (2012) で扱った D 型 [D-GEN#H]、B) 後行型 [H#D(PRN)-GEN]」= (4) が H' 型 [H=POSS]、

[6] 服部 (1986: 201) も同様の推測をおこなっている。ただし、3 人称単数 *i- および複数 *a- に由来する人称代名詞は現在のモンゴル諸語の多くで失われている。

C) 二重型 [D-GEN#H#PRN-GEN] = (5) が DH 型に、歴史的にそれぞれ対応するということになる。B) の後行型は、被所有者の後に位置するという点ではハムニガン・モンゴル語などの H' 型と共通する。しかしながら、Nichols (1986, 1988) の提示する Head-marking / Dependent-marking の観点では B) 後行型は A) 先行型と同じく所有者が有標／被所有者が無標となっているとみなされるため、双方とも D 型ということになる。

人称代名詞属格形の先行型と後行型について、Ičinose (1988: 41-42) は次の (6)(7) の例[7]をあげたうえで、この両者の使いわけには情報構造が関与しており、誰が所有者であるのかを聞き手が把握している場合には後行型に、所有者を聞き手が把握していない場合や、聞き手が知っていても強調したい場合には先行型になると指摘している（表 2）。

表 2. Ičinose (1988) の指摘する『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形の使いわけ

	先行型	後行型
所有者を聞き手が把握している	×	○
所有者を聞き手が把握していない／把握していても強調したい	○	×

(6) Jelme ügüle-rün «***min-u*** ***setkil*** ničügün od-u-run...»
PSN 述べる-CVB.PREP **1SG-GEN** ***心*** 裸 行く-E-CVB.PREP
「ヂェルメの言うのに、わが心は、裸で行く時...（上: 157）」 [§145. 04:42:01-02]

(7) ta qoyar nama-yi se'üder-eče busu nökör ügei-ṭur se'üder bol-ǰu
2PL:NOM 二 1SG-ACC 影-ABL 他に 友 ない-DAT 影 なる-CVB.IPFV
setkil ***min-u*** amu'ul-ba.
心 **1SG-GEN** 休ませる-PST
「汝等二人は我が影より他の伴友（ノコル）なき時に影たりて、わが心を安んぜしめたるぞ（上: 119）」[§125. 03:48:07-09]

(7) ではすでに nama-yi (1SG-ACC)として話し手に関する内容であることが言及されていることから、setkil が話し手に関連する語句であることはすでに聞き手にわかっているので後行型が用いられていると Ičinose (1988: 42) は指摘している。さらに Ičinose (1988: 42) は現代モンゴル語についても同様の用法があることを示し、その類似性を指摘している。

たしかに現代のモンゴル語諸方言において、所有者が話し手であることを聞き手が把握していない事物に対して、1 人称所有小詞が用いられる例（すなわち後行型／H' 型）は確認されない[8]。しかしながら、聞き手がすでに所有者を把握している状況で、なおかつ「所有者を強調」しているとは考えられない場合にも人称代名詞属格形が先行して用いられることは、現代モンゴル語ハルハ方言 (8)、『秘史』モンゴル語 (9) にかかわらず確認される。

[7] Ičinose (1988) の例文を本稿における転写方式におきかえて例示する。これまで同様、和訳は小澤 (1997a)、グロスは筆者によるものである。
[8] 2 人称・3 人称に関してはすでに人称標示機能を失っているとみられるケースが多いため、このかぎりではない。

(8) モンゴル語ハルハ方言[9]（Julie が Delgermaa に家族のことを尋ねている場面。すでに誰の両親に関する内容か、聞き手が把握している）

Julie: ***tan-y*** ***aav*** ***eeǰ*** xojor ulaanbaatar-t suu-dag uu?
2SG.HON.GEN **父** **母** 二 PLN-DAT 住む-VN.HBT Q
「<u>あなたの両親</u>はウランバートルに住んでいますか」

Delgermaa: ***minij*** ***aav*** nas bar-san. ***minij*** ***eeǰ*** ulaanbaatar-t suu-dag-güj.
1SG:GEN **父** 齢 尽きる-VN.PFV **1SG:GEN** **母** PLN-DAT 住む-VN.HBT-NEG
「<u>私の父</u>は亡くなりました。<u>私の母</u>はウランバートルに住んでいません」

Sanders and Bat-Ireedüi (1999: 51)

(9)『秘史』モンゴル語（チンギス合罕が配下のバダイ、キシリグ二人を称賛している場面。すでに直前でチンギス自身の地位（下線部）についての言及がなされている）

「また、チンギス合罕が仰せになるには、『バダイ、キシリグ二人がわが命の生死の間に功助（たすけ）をもたらせしゆえ、永（とこしえ）の天神の加護にてケレイド人衆を下し、<u>高みの位に到れるぞ</u>…（下: 12）」

mona qoyina uruq-un uruq-a ***min-u*** ***oron-ṭur*** sa'u-ǰu ene metü
今 後 親族-GEN 親族-LOC **1SG-GEN** **位-DAT** 座る-CVB.IPFV この ように
tusa gürge-ksed-i ulam ulam uqa-tuqai.
功助 到らしむ-VN.PFV.PL-ACC さらに さらに 理解する-3:OPT

「この後、子子孫孫にまで——<u>我が位</u>に即きたる者は——かくの如き汝等の功助（いさおし）を到せることごとを省察せよ（下: 12）」[§187. 07:03:08-10]

また聞き手が所有者を把握していないと考えられるのに後行型が用いられる例も『秘史』に確認される。たとえば (4) で示した例文の直前に、同様の状況が初めて話者によって語られる箇所がある。そこでは a) 誰の手であるか聞き手は把握していない、b) 誰のところに海青（おおたか）が来たのかを強調する必要がある、という状況から所有者をまず示す先行型が用いられることが想定されるが、 (4) 同様に人称代名詞は後行して用いられている (10)。このように、Ičinose (1988: 41-42) の上記の主張があてはまらない例があるのも事実である。このような理由からも、『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形のふるまいを再検討する必要がある。

(4 再掲) edö'e ene šingqor atqu-ǰu abčira-ǰu ***qar-tur*** ***min-u*** tu'u-ba.

「今、この海青の掴みもち来たりて、<u>わが手に</u>とまれり（上: 39）」[§63. 01:43:08-09]

(10) čaqan šingqor naran sara qoyar-i atqu-n nis-ǰu ire-ǰü
白い 海青 太陽 月 二-ACC つかむ-CVB.MOD 飛ぶ-CVB.IPFV 来る-CVB.IPFV

[9] 現代モンゴル語の例文は、現行のキリル文字正書法をローマ字に転写してあらわす。

qar ***de'ere*** ***min-u*** tu'u-ba.
手　上に　**1SG-GEN** 留まる-PST
「白き海青、日月二つを掴み飛び来たりて、わが手の上にとまれり（上: 38）」[§63. 01:43:05-06]

4. 使用例と分布

栗林・确精扎布編 (2001) から抽出した人称代名詞属格形および物主代名詞の用例は 713 例[10]確認される。人称・数ごとの内訳は次頁表 3 のとおりである。ただし属格形は単に名詞を head として所有者をあらわすだけでなく、以下のように用いられる場合（a〜c）がある。これらに該当する用例数を表 3 カッコ内に示した。このカッコ内の 80 例は所有構造をなしているとはいいがたいため、総数 713 例から除き、残りの 633 例を分析対象とする。

a. 動詞の屈折形式（形動詞・副動詞）を head として主語をあらわす場合: (11)
b. 後置詞的要素（tula「〜ために」, metü「〜如く」, esergüü「〜に対抗して」, etc.）や場所名詞（emüne「前に・南に」, ebür「南面に」, qoyina「後に・北に」, urida「前に」, de'ere「上に」, dotora「中に」, dergede「傍らに」, ǰa'ura「間に」, ča'ada「側に」, etc.）を head とする場合: (12)(13)
c. 属格形（とくに物主代名詞）それ自体が名詞句の head となっており、被所有者に相当する head があらわれない場合[11]: (14)

(11) ***teberi-gü*** ***čin-u*** daba'at olon daba-ba.
抱く**-VN.FUT** **2SG-GEN** 嶺:PL 多い 越える-PST
「汝のいだける人、嶺々を多く越えたり（上: 35）」[§56. 01:37:10-38:01]

(12) ***min-u*** ***tula*** či erüste-üǰe'i.
1SG-GEN ために 2SG:NOM 害を被る-DBT
「我がため、汝、害を蒙らざらめ（上: 72）」[§91. 02:32:04]

(13) ***bidan-u*** ***ča'ada*** tümen kešikten-i bökele-ǰü yeke qol bol-u-n a-tuqai.
1PL.INCL-GEN 側に 一万 輪番兵:PL-ACC 強くする-CVB.IPFV 大きい 中央 なる-E-CVB.MOD COP-3:OPT
「我等の傍らに一万の近衛輪番兵を強からしめ、大いなる本営たりてあるべし（下:

[10] この総数は栗林・确精扎布編 (2001: 619-872) 記載の各形式総数に一致する。一ノ瀬 (1988: 19), Ičinose (1988: 31) の総数と異なっているが、これは底本が異なることに起因すると推測される。
[11] すでに 3 節で述べたように、物主代名詞は属格形に「〜のもの」を示す接尾辞 -ai ~ -ei が接続したものである。『秘史』には表 3 の物主代名詞の用例 8 例のほか、普通名詞に -ai ~ -ei が接続した例が 10 例確認される。しかしながら、このうち 1 人称単数物主代名詞 minu'ai の 1 例 [§245. 10:34:08] 以外はすべてそれ自体が名詞句の head となっており、被所有者があらわれない。他に bidan-u に 1 例 [§266. 12:18:04]、被所有者があらわれないケースが確認される。こうした例を表 3「H なし」に含めた。

109）」[§226. 09:40:01-02]

(14) dar-u-n　bara-asu　tere　olǰa　***bidanu'ai***　büi　ǰe.
圧する-E-CVB.MOD　尽きる-CVB.COND　その　戦利品　**1PL.INCL.PP**　COP　MDL
「圧え終わらば、その戦利品は<u>我等のもの</u>なるぞ」[§153. 05:17:06-07]

表 3. 『秘史』モンゴル語における人称代名詞属格形の出現数と被所有者 (H) との関係

	先行型	後行型	二重型	H なし	計
1SG (*min-u*)	35(+10)	163(+13)	0	0	198(+23)
1SG.PP (*min-u'ai*)	1	0	0	0	1
1PL.EXCL (*man-u*)	0	10(+1)	0	0	10(+1)
1PL.EXCL.PP (*man-u'ai*)	0	0	0	0(+1)	0(+1)
1PL.INCL (*bidan-u*)	32(+6)	26(+2)	0	0(+1)	58(+9)
1PL.INCL.PP (*bidan-u'ai*)	0	0	0	0(+6)	0(+6)
2SG (*čin-u*)	4(+3)	83(+7)	1	0	88(+10)
2PL (*tan-u*)	2(+1)	13(+3)	0	0	15(+4)
3SG (*in-u*)	3(+3)	172(+12)	31(+4)	0	206(+19)
3PL (*an-u*)	3(+2)	50(+5)	4	0	57(+7)
総計	80(+25)	517(+43)	36(+4)	0(+8)	633(+80)

分析にあたっては、Yamakoshi (2012) 同様、Tsunoda (1995: 576) の提案する所有傾斜の階層 (possession cline) にならい、I. 身体部位、II. 身体属性、III. 衣服、IV. 親族、V. 愛玩動物、VI. 作品、VII. その他、の 7 つのクラスに分類する。ただし VII については、便宜のため筆者が独自に下位分類して示す。

各構造の分析の前にこの前頁表 3 から読み取れるのは、『秘史』モンゴル語では先行型の出現頻度が後行型に比べて低いという点である。Yamakoshi (2012) が分析対象とした 3 言語（ハムニガン・モンゴル語、シネヘン・ブリヤート語、モンゴル語ハルハ方言）では、ハムニガン・モンゴル語が他の 2 言語に比べて顕著に D 型の頻度が低かった。この点では『秘史』モンゴル語とハムニガン・モンゴル語は共通した傾向を有するといえる。

続いて、「人」のみを指示する 1 人称・2 人称代名詞と、「モノ」も指示しうる 3 人称代名詞とにわけて用例の分布を確認する。

4.1. 1 人称・2 人称代名詞

表 3 の 1 人称･2 人称代名詞の 8 形式のうち、被所有者名詞とともに用いられた 370 例（先行型 74 例、後行型 295 例、二重型 1 例）における被所有者には次のような語が用いられている（丸カッコ内は用例数、角カッコ内は各クラスの合計数をあらわす）。

先行型 [74]:

I. 身体部位[6]　beye 身体 (5), qo'olai 喉 (1)

II. 身体属性[10]　üge 言葉 (4), setkil 心 (1), amin 命 (1), dawun 声 (1), a'ur#kiling 怒気 (1), aburi 性行 (1), ǰöb 正しさ (1)

IV. 親族[7]　uruq 親族 (5), nagača 母方親族 (1), üčüget 幼子ら (1)

V. 愛玩動物[12][4]　aqtas 騸馬群 (3), qongqor 薄栗毛の馬 (1)

VII. その他[47]　（近しい友人等[2]）人名 (2)

（配下・成員[30]）čerik/čeri'üt 軍/兵士達 (10), kešigten 輪番兵 (10), qara'ul 斥候 (4), manglan 先遣隊 (2), itegelten ina'ut 信頼おく寵臣 (1), a'uru'ut 留守陣 (1), daruqas 首長達 (1), ulus 民人 (1)

（場所[2]）地名 (1), kilü'ese 聚馬場 (1)

（その他具体物[1]）umda'an#ide'en 飲食物 (1)

（その他抽象名詞[12]）oro 位 (3), buru'u 過失 (3), ǰarliq 勅 (2), turuq 支え (1), ya'u 何 (1), bolǰa'an 約会 (1), tusa 功助 (1)

後行型 [295]:

I. [38]　beye 身体 (8), qar 手 (6), ke'eli 肚 (3), če'eǰi 胸 (3), dotora 身体 (2), gem 鎖骨 (2), güǰü'ün 頸 (2), kökö/ kököt 乳房 (2), burbui 後腱 (1), eber 角 (1), eteri'ün 頭 (1), helige 肝 (1), ǰirüge 心臓 (1), mariya 肌 (1), nidün 目 (1), ni'ür 顔 (1), ölük#yasun 遺骨 (1), qala'un 女陰 (1)

II. [25]　amin 命 (8), setkil 心 (5), üge/üges 言葉 (3), külük 剛毅さ (2), ǰewudün 夢 (1), hači 恨み (1), hünür 香り (1), ǰöb 正しさ (1), kelen 言葉 (1), nere 名 (1), üyyile おこない (1)

III. [5]　ǰaqa 襟 (1), ǰahing 奥襟 (1), buqa'u 枷 (1), buyi 襁褓 (1), qučasun 衣服 (1)

IV. [126] ečige 父 (48), kö'ün/kö'üt 子/子達 (28), eke 母 (7), de'ü/de'ü#ner 弟/弟達 (7), ökin 娘 (5), uruq 親族 (4), aqa 兄 (3), aqa#de'ü 兄弟 (3), ebüges#ečiges 祖宗の人士 (3), caqa 幼子 (2), abaga 叔父 (2), qadun 妃 (2), ere 夫 (2), eme 妻 (1), egeči 姉 (1), elinčük 曾祖父 (1), borqai 遠き祖先 (1), börte#üǰi ボルテ夫人 (1), qatun#börte 后ボルテ (1), qasar カサル（チンギス汗の弟）(1), eme#kö'ün 妻子 (1), ere#harat#eme#kö'üt 男ども妻子ども (1), kötöčin 家人達 (1)

V. [5]　aqtas 騸馬群 (2), adu'un 馬群 (1), ere#aqta 人馬 (1), noqan 犬 (1)

VII. [96]　（近しい友人等[15]）anda 盟友 (7), temüǰin/temüǰin#anda テムジン/盟友テムジン (6), nöküt 友ら (1), qan ハン (1)

（配下・成員[48]）人名 (4), ulus 民人 (15), kebte'ül 宿衛兵 (7), dörben#külü'üt 四傑 (3), kešigten 輪番兵 (3), čerik/čeri'üt 軍/軍達 (2), elčin 使者 (2), adu'učin 馬飼い (2), qoničit#quriqačit 羊飼い・子羊飼い (2), qara'ul 斥候 (1), beki#mör 長老 (1), busud 他者 (1), irge#orqo 人衆・散民 (1), gü'ün 人 (1), eme#kö'ün#adu'un#ide'en 女子供・馬群・食糧 (1), irgen#adu'un#ide'en 人衆・馬群・食糧 (1),

[12] Tsunoda (1995: 576) では “pet animal” と定義されているが、本稿では家畜も含める。Nichols (1988: 572) は譲渡不可能的な所有物の例として “domestic animals” をあげている。

qali#širi#qatun#eme 財人・貴婦人 (1)

（その他具体物[18]）bosoqa 閾 (6), ger ゲル (5), e'üten 戸帳 (3), gürdün 車輪 (1), kilgün 轅 (1), qolumta (1), qor 矢筒 (1)

（その他抽象名詞[15]）tusa/tusas 功助 (8), buru'u 過失 (2), eye 和議 (2), mör 途路 (1), qala 命令 (1), čimar 咎 (1)

二重型 [1]

II. [1] ǰewüdün 夢 (1)

二重型の 1 例は、所有者 (= D) には普通名詞が用いられている (15)。

(15)（チンギス罕と盟友の契りを結んだヂャムカがチンギス罕に対し）

munda ***anda-yin*** ***qara*** ***sönin-ü*** ***ǰewüdün-ṭür*** ***čin-u*** oro-qu bi.

却って **盟友-GEN** **黒い** **夜-GEN** **夢-DAT** **2SG-GEN** 入る-VN.FUT 1SG:NOM

「むしろ、盟友の黒き夜の夢に←汝の、現わるべし　我（下: 58）」[§201. 08:18:07-08]

(15) の被所有者に先行する所有者 D は 2 人称単数代名詞属格形 čin-u であらわされていない。1 節 (1b) に例示したハムニガン・モンゴル語の DH 型（**minii**#akaa=**mini** [**1SG:GEN**#兄=**1SG:POSS**]）は被所有者に先行する D も人称代名詞属格形が用いられており、(15) とは形式が異なる。そこで、ひとまず「人称代名詞属格形が先行するか、後行するか」という観点から (15) の例は後行型に含め、先行型、後行型それぞれの総数を 100 とした割合で所有傾斜上の各クラスを示すと、次表 4 のようになる。

表 4.　1 人称・2 人称代名詞属格形の階層別使用頻度

	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
先行型 (74)	8.1% (6)	13.5% (10)	0% (0)	**9.5% (7)**	5.4% (4)	0% (0)	63.5% (47)	100% (74)
後行型 (296)（二重型 1 例を含む）	12.8% (38)	8.8% (26)	1.7% (5)	**42.6% (126)**	1.7% (5)	0% (0)	32.4% (96)	100% (296)

（パーセンテージは小数点第 2 位以下を四捨五入して示す。カッコ内は用例数）

先行型と後行型とで大きく異なっているのが、IV. 親族名称を被所有者とする用例の頻度である。Tsunoda (1995)における親族名称の階層上の位置づけは 4 番目であるが、Nichols (1988: 572) は親族名称を身体部位と同等に階層最上位に位置づけ、より譲渡不可能的な所有物であるとしている。この親族名称のうち、父母兄弟のような直系の親族はすべて後行型であらわれており、先行型で「所有者の[親族]」をあらわす例はわずかしかない。また、VII. その他所有物の頻度も先行型と後行型との間に差がある。この VII には親族に準ずる存在と文脈上読み取れる「近しい人物」も 17 例含まれており、そのうちの 15 例（88.2%）が後行型であらわれている。

以上から、先行型よりも後行型のほうが譲渡不可能物に用いられやすい傾向はあるとい

える。ただし相補的な使い分けではなく、同じ被所有者（e.g. beye「身体」）であっても先行型、後行型両方で用いられている例がある。つまり、人が所有者となる場合、譲渡不可能物には常に所有人称小詞が接続するハムニガン・モンゴル語のケース（第 1 節参照）とは異なる。

4.2. 3 人称代名詞

続いて、3 人称代名詞属格形を所有者にとる被所有者についてみていく。本節冒頭で提示した表 3 からわかるように、3 人称代名詞には二重型の例が他の人称よりも多く存在する点、先行型の用例が非常に少ない点が特徴的である。先行型は 3 人称代名詞属格形の用例 263 例のうち、6 例（2.3%）が確認されるのみであった。二重型において先行する所有者属格形 (D) の位置には、2 人称代名詞の場合同様、人称代名詞は用いられない。

一ノ瀬 (1988: 26) は 3 人称代名詞属格形が先行する場合はすべて「人」をあらわし、3 人称代名詞属格形が後行する場合にかぎって「人」以外をあらわしうることを指摘している。実際に『秘史』モンゴル語の 3 人称代名詞属格形後行型、二重型には、以下のように「動物」を指す場合 (16)、日時等を指す場合 (17)、すでに言及された事柄に照応する場合 (18) などの例が 24 例みられる。

(16) qubi-yu'an ***quya*** ***in-u*** delet-čü quburi nambali-s
淡黄馬-REFL **腿** **3SG-GEN** 打つ-CVB.IPFV 岡 越える-CVB.MOM
buru-qui-lu'a qoyina-ča in-u quba'ula uda'araldu-ba.
逃げる-VN.FUT-COM 後ろ-ABL 3SG-GEN 三人で 追跡しあう-PST
「己が淡黄馬の後腿を打ち、岡を越え逃げ行くや、その後より、三人して、相次いで追跡した（上: 34）」[§55. 01:35:02-03]

(17) ***manaqaši*** ***in-u*** Tayang#qan-i muqutqa-ǰu ab-u-bai.
翌日 **3SG-GEN** PSN#王-ACC 誅する-CVB.IPFV とる-E-PST
「その明くる日、（チンギス罕は）タヤン罕を誅しきった（下: 30）」[§196. 07:43:05]

(18) ***Teb*** ***in-u*** tende bolqaqda-ba.
PSN **3SG-GEN** そこに 審べられる-PST
「たしかに（くだんの）テブはそこに審（しら）べられた（下: 148）」[§246. 10:43: 03]

ハムニガン・モンゴル語では「人」が所有者となる場合に譲渡可能性が関与することを Yamakoshi (2012: 281-282) で指摘した（本稿 1 節参照）。本稿でも所有者が「人」か、「人」以外であるかを区別して示す。以下、先行型、後行型、二重型の順に被所有者名詞の内訳を示す。

先行型 [6]:
I. [1] beye#qad 自ら (1)

II. [1]　üge 言葉 (1)
IV. [1]　uruq 親族 (1)
VII. [3]　qubi 財分 (2), qor 矢筒 (1)

後行型 [222]:
I. [42]　teri'ü 頭 (3), yasun 骨 (4), niru'u 背 (3), qar 手 (4), köl 足 (3), qar#köl 手足 (1), beye 身体 (3), eki(t)～heki 頭 (3), mürü(s)肩 (2), ni'ur 顔面 (2), čisun 血 (2), elige(t)～helige 肝臓 (2), šibirger 辮髪 (2), aman 口 (1), borbi アキレス腱 (1), doro 下半身 (1), ebče'ü(t) 胸 (1), ebür 懐 (1), güjü'ü(t) 頸 (1), öre 鳩尾 (1), qo'olai 喉 (1)
II. [18]　üge(s) 言葉 (9), ami 命 (2), činar 心性 (1), genü'er 悲しみ (1), oyi 理知 (1), qara'a 姿 (1), setkil 心 (1), gege'en 光 (1), temdek しるし (1)[13]
III. [5]　ǰaqa(s) 襟 (2), maqalai#büse 帽子・帯 (2), maqalai 帽子 (1)
IV. [65]　kö'ün/kö'üt 子/子達 (23), öki(t) 娘/娘達 (3), aqa 兄 (9), de'ü 弟 (4), ečige 父 (3), eke 母 (4), eme 妻 (6), eme#kö'ün 妻子 (2), ere 夫 (2), gergei 妻 (2), angqa ike 長兄 (1), berinet#ökit 嫁達・娘達 (1), ečige#eke 父母 (1), egečimet 姉 (1), eke#de'ü#ner 母・弟達 (1), naqaču#nar 母方親族達 (1), uruq 親族 (1)
V. [2]　aqta 騸馬 (1), hüker 牛 (1)
VII. [75]　（近しい友人等 [3]）nököt 僚友達 (1), qan ハン(2)
（配下・成員 [29]）adu'uči 馬飼い (1), balaqat#irge 城塞・人衆 (1), čeri'üt 兵士達 (1), elči 使者 (1), irge#orqa 人衆・散民 (2), irgen 人衆 (7), ulus 民人 (7), ken 誰 (1), kešikten 輪番兵 (2), noyan 長官 (1), qara'ul 哨兵/斥候 (2), qol 本隊 (2), tariyaǰin 農民達 (1)
（その他具体物 [25]）ači'a 荷 (1), adu'un 馬群 (1), adu'u#ordo#ger 馬群・宮居 (1), altan mönggün a'urasun tabar alašas se'üses 金銀、絹布、財物、馬匹、小使達 (1), balaqat 城塞 (2), bari'as 枷 (1), belge 割符 (1), buqa'u 枷 (1), e'ede 門框 (3), eme'el 鞍 (1), ger/ordo#ger ゲル/宮居 (3), ger#tergen ゲル・車 (1), hoi 森 (1), ǰantawu 盃 (2), ölegei#könǰile 揺籃・衾 (1), qor 矢筒 (1), qorqan 砦 (1), tariyat 種つもの (1), tergen 車 (1)
（その他抽象名詞 [18]）aburi 内実 (1), adarqan 譏り (1), eye 和議 (1), mör 跡/道 (2), oro 居所 (1), qari'u 返答 (2), qa'uluqa 路 (2), qurim 宴 (1), sayid 善きもの (1), šilta'an 故 (1), södürgen そそのかし (1), tusa 功助 (1), üyyile おこない (1), ya'u 何 (1), yosun 理 (1)

※非人間所有者[14]
動物[7]:
(I. [6])　arasun（獣の）皮 (1), qa（獣の）前足 (1), abit（三歳鹿の）小肋骨 (1), qabirqas（三歳鹿の）肋骨 (1), quya（獣の）腿 (1) /（淡黄馬の）腿 (1)

[13] gege'en「光」、temdek「しるし」の 2 例の所有者は、「白黄色の人（上: 20）」という神格化された存在であり、厳密には人間とはいいがたいが、擬人化している例ととらえる。

(III. [1]) inggirčaq（その馬の）荷鞍 (1)
無生物[1]　　či'ü（車の）轅 (1)
場所[2]　　ebesün（かの地の）草 (1), görü'en（かの地の）獣 (1)
日時[4]　　manaqari/manaqaši （その日の）翌日 (2), namur（その年の）秋 (2)

※前方照応[1]　Teb（くだんの）テブ (1)

二重型 [35]
I. [5]　　teri'ü 頭 (2), bökse 尻 (1), ǰürüge 心臓 (1), niru'u 背 (1)
II. [2]　ami 命 (1), üge 言葉 (1)
III. [1]　　ǰaqa 襟 (1)
IV. [10]　kö'ün/kö'üt 子/子達 (6), aqa#nar 兄達 (1), eme#kö'ün 妻子 (1), ökit 娘達 (1), qatut 妃達 (1)
VII. [8]　irgen 人衆 (1), erüge 天窓 (1), qor 矢筒 (1), tergen 車 (1), tusa 功助 (4)

※非人間所有者[9]
動物[6]:
I. [6]　quya（獣の）腿 (1)/（淡黄馬の）腿 (1)/（三歳鹿の）腿 (1) , aman#niru'u（口白の黄馬の）頚骨 (1), ke'eli（獣の）肚 (1), ödön#hüsün（雁や鴨の）羽毛 (1)
無生物[2]kimul （十指の）爪 (1)/（五指の）爪 (1)
場所[1]　altan mönggün et a'urasun ya'u（中都[14]の）金銀、財物、布帛などくさぐさの物品 (1)

所有者が人である場合にかぎった、各タイプの用例数（先行型 6 例、後行型 207 例（総数 222 例から「人」以外の所有者 15 例を除いたもの）、二重型 26 例（総数 35 例から「人」以外の所有者 9 例を除いたもの））をそれぞれ 100 とした場合の割合を表 5 に示す。

表 5.　3 人称代名詞属格形の階層別使用頻度

	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
先行型	16.6% (1)	16.6% (1)	0% (0)	16.6% (1)	0% (0)	0% (0)	50% (3)	100% (6)
後行型	20.3% (42)	8.7% (18)	2.4% (5)	31.4% (65)	1.0% (2)	0% (0)	36.2% (75)	100% (207)
二重型	19.2% (5)	7.7% (2)	3.8% (1)	38.5% (10)	0% (0)	0% (0)	30.8% (8)	100% (26)

（パーセンテージは小数点第 2 位以下を四捨五入して示す。カッコ内は用例数）

先行型の用例が少ないため単純な比較は難しい。後行型の内訳は 1, 2 人称代名詞属格形

[14] 現在の北京をさす (小澤訳 1997b: 194)。

の場合（4.1. 表 4）と比べ、数字の上での差はほとんどない。ただし、VII.「その他」の内訳をみると、1, 2 人称代名詞属格形後行型に比べ、3 人称代名詞属格形後行型のほうが VII.「その他」のなかの具体物、つまり実際に譲渡可能な物に対して用いられている例が若干多く（1, 2 人称後行型 295 例中 18 例 (6.1%); 所有者が人の場合の 3 人称後行型 207 例中 25 例 (12.1%)）、譲渡可能性が関与しているとはみなしにくい。

一方、3 人称代名詞属格形二重型の VII. 「その他」にも同じく譲渡可能物とみなすことのできる名詞が用いられている。ただし、それらは『秘史』中に強さを象徴する武具としてあらわれる qor「矢筒」、所有者の配下である irgen「人衆」など、『秘史』の文脈上所有者と比較的密にかかわっている存在や「衣服」と同じく実際に身につけている道具などの例である。さらに所有者が人ではない場合は、「日時」「前方照応」の例以外すべて [全体#部分] の関係をなしている。こうした点を見れば、二重型は譲渡不可能物に対して用いられているようにも見える。

しかしながら、譲渡不可能物との所有関係に対して、3 人称代名詞属格形を伴わない [普通名詞-GEN#身体部位] [普通名詞-GEN#親族] といった (19) のような例は二重型、後行型以上に多く用例が確認される[15]。つまり、後行型代名詞属格形があらわれるか否かで譲渡可能性が相補的に区別されているわけではない。

(19) bida　　iču-ǰu　　***qahan-u***　***mara'a***　seri'üd-ü-esü　　basa　ǰiči
1PL:NOM　退く-CVB.IPFV　**合罕-GEN**　**肌**　冷える-E-CVB.COND　再び　さらに
morila-t　　ǰe　bida.
出発する-CNCL[16] MDL　1PL:NOM
「我等は退きて<u>合罕の肌</u>寒めやらば再びさらに出陣せんぞ　我等（下: 212）」[§265. 12:02:07-08]

ただし、所有者と被所有者が密接な関係をなしていないとみられるケースで二重型があらわれることはない。たとえば動物が所有者となっている場合、二重型はもっぱら身体部位（および馬具が 1 例）が被所有者になるが、先行型の被所有者には身体部位名詞だけでなく tuqul-un#belǰi'ür「仔牛の牧草地」[§194. 07:28:02]、morin-u#ǰanda'ul「馬の乾いた糞」[§174. 06:17:03] のような例もみられる。また、ǰarliq「勅（勅令）」のように先行型でしか所有者があらわされない被所有者名詞も存在する[17]。こうした点を考えると、先行型は譲渡可能かどうかにかかわらず用いることが可能であるが、二重型は譲渡不可能物にほぼ限定して用

[15] 普通名詞属格形が所有者として被所有者名詞に先行し、かつ被所有者名詞の後に人称代名詞属格形があらわれない形式＝先行型 [D-GEN#H] は 1,109 例確認される。このうち人が所有者となっているケース 481 例のうち、被所有者に身体部位がくるケースは 86 例（17.9%）、親族名称が位置するケースは 171 例（35.6%）ある。割合としても、用例数としても人称代名詞属格形後行型、二重型に比べ少ないとはいえない。

[16] この接尾辞の名称・機能については検討の余地があるが、小澤 (1993: 112-113) が「複数の主体・集団がある動作を断定的に遂行する」意味をあらわし、conclusive form と名付けていることから、ひとまずこれに従う。

[17] ǰarliq が所有者とともにあらわれる例は『秘史』中 11 例確認される（1 人称単数属格形 min-u、1 人称複数包括形 bidan-u が各 1 例、その他 qahan-u「合罕の」などの普通名詞が 9 例）。これらはすべて D 型が用いられている。

いられるということが推測される[18]。

3 人称代名詞 *i / *a は、『秘史』モンゴル語ではすでに主格形はあらわれず（2 人称主格形は 255 例）、ここまで見たように属格形も後行型に偏っている。これらから、3 人称代名詞は『秘史』モンゴル語では徐々に自立語としての地位を失い、そのうちの属格形が付属語化しつつあることがよみとれる。この点が 1, 2 人称と大きく異なる変化といえる。3 人称代名詞属格形が付属語化していく過程であらたに所有者を示す属格名詞が要求されるようになり、二重型が用いられるようになる。その結果、付属語化した 3 人称代名詞属格形は余剰的な形式となる。その余剰的な形式に対して、ハムニガン・モンゴル語では「譲渡可能性」といった機能が付与されたり、モンゴル語ハルハ方言では「所有」の意味合いが薄れ「情報構造」にかかわるマーカーとして機能するようになったり、と各言語それぞれ別個の変化がおこったのではないかと推測する[19]。

5. 結論

以上見てきた点をまとめると、『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形と譲渡可能性との関係は以下のようにまとめられる。

1) すべての人称において後行型が先行型に比べて優勢である。
2) すべての人称において、先行型と後行型とのあいだに譲渡可能性に関する相補的な使いわけは確認できない。
3) 1, 2 人称においては後行型が先行型に比べて譲渡不可能物に対して用いられやすい。ただし同様の関係を先行型であらわすこともできる。
4) 普通名詞が所有者として属格形で用いられる場合、3 人称代名詞属格形が被所有者に後行する二重型は、所有者が「人」か「人」以外かにかかわらず、譲渡不可能物に限定して使われる。その反面、先行型は譲渡可能／不可能の区別なく用いられる。

ハムニガン・モンゴル語の所有構造との対比を表 6 に示す。すでに述べたとおり、『秘史』モンゴル語の先行型・後行型・二重型はハムニガン・モンゴル語の D 型・H' 型・DH 型に歴史上それぞれ対応する。

---

[18] なお、1 節でも述べたようにハムニガン・モンゴル語の譲渡可能性は所有者が「人」である場合に限定して適用される。『秘史』モンゴル語の二重型は「人」以外の場合も譲渡不可能物に対してのみ用いられている。

[19] この仮説はハムニガン・モンゴル語、モンゴル語ハルハ方言が『秘史』モンゴル語にさかのぼれるという前提によって成立する。直接さかのぼれるかどうかについてはより慎重に今後検討する必要がある。ただし『秘史』モンゴル語（中期モンゴル語）と（ハルハ方言を含む）現代モンゴル語との関連については本稿で扱った一ノ瀬 (1988), Ičinose (1988) をはじめ、多くの先行研究で比較がなされており、『秘史』モンゴル語とハムニガン・モンゴル語に関しても Janhunen (2003) などで比較されている。

表 6. 『秘史』モンゴル語（A）とハムニガン・モンゴル語（B）の所有構造の対比

A. 『秘史』モンゴル語の所有構造と譲渡可能性			
譲渡可能性と有生性との関連	無？（二重型は有生性に関係なく譲渡不可能）		
	先行型	後行型	二重型
頻度	低	高	（3 人称にほぼ限定）
譲渡可能物	◎	○	×
譲渡不可能物	○	○	◎

B. ハムニガン・モンゴル語の所有構造と譲渡可能性			
譲渡可能性と有生性との関連	有（人が所有者の場合のみ譲渡可能性が関与）		
	D 型	H' 型	DH 型
頻度	低	高	高（すべての人称）
譲渡可能物	○	×	×
譲渡不可能物	×	○	○

（◎は○よりも強い傾向があることを示す）

以上示したように、『秘史』モンゴル語における人称代名詞属格形先行型と後行型の使いわけは、ハムニガン・モンゴル語にみられるような譲渡可能性による区別とは異なる。Nichols (1988: 576) は従属部標示型の言語においては、譲渡可能性による区別がないことを指摘している。すくなくとも 1 人称、2 人称代名詞が所有者となる場合、『秘史』モンゴル語の属格先行型／後行型はいずれも従属部標示型である。ともに従属部標示型である先行型と後行型とのあいだに譲渡可能性による明確な区別がないという点は、Nichols (ibid.) の指摘にもあてはまる。ここまで見たように傾向として後行型のほうが密接な所有物に対して用いられているようにみえるが、あくまで傾向であり、区別がなされているわけではない。

一方、3 人称代名詞については、被所有者に後行する属格形 in-u / an-u が『秘史』モンゴル語で付属語化しつつある。この変化によって、二重型 [D-GEN#H#3SG-GEN] / [D-GEN#H#3PL-GEN] における被所有者をあらわす名詞 H と、それに後続する 3 人称代名詞属格形 #3SG-GEN / #3PL-GEN の関係を見るかぎりは「主要部が有標」である構造が生まれつつあったといえる。そして、この構造は 3 人称代名詞属格形先行型などの他の構造と共存していた。

ところで Nichols (1988: 578) や津曲 (1992: 277) は、（一つの言語において、所有表現が複数存在する場合には）Head（＝被所有者）が有標であるか、Dependent（＝所有者）が無標であるほど、所有者-被所有者の関係が緊密であるという通言語的傾向が観察されることを指摘している。この通言語的傾向に従うかたちで、『秘史』モンゴル語では主要部が有標となりつつある 3 人称における二重型 [D-GEN#H#3SG-GEN] / [D-GEN#H#3PL-GEN] によって、譲渡不可能所有をあらわす傾向が見られるようになったと推測する。

一方、ハムニガン・モンゴル語に影響を与えたと考えられるエヴェンキ語では、被所有

者名詞に接続する譲渡可能接辞によって譲渡可能／不可能を区別する現象がある。この現象も Nichols (1988), 津曲 (1992) の指摘する通言語的傾向に従っているが、『秘史』モンゴル語とは独立に生じた現象であると考えられる。『秘史』モンゴル語において、譲渡可能性に関する使いわけの傾向が生じつつあったところに、エヴェンキ語の譲渡可能性に関する現象が影響を与え、その結果ハムニガン・モンゴル語では被所有者名詞に接続する所有人称小詞（＝付属語化した人称代名詞属格形）の有無によって、譲渡可能／不可能を区別する現象がより強化されたのではないかと考える。

* 本稿執筆にあたり、匿名の査読者の方より有益な助言、ていねいなコメントをいただくことができました。末尾ながらここに深く感謝の意を表します。なお、本稿における誤謬は全て筆者の責任によるものです。

略号一覧

-: 接辞境界／#: 語境界／=: 接語境界／1, 2, 3: 人称／ABL: 奪格／ACC: 対格／CNCL: 結論／COM: 共同格／COND: 条件／COP: コピュラ／CVB: 副動詞／D: 従属部（所有者）／DAT: 与格／DBT: 疑念／DED: 演繹的／E: 挿入音／EXCL: 除外／FUT: 未来／GEN: 属格／H: 主要部（被所有者）／HBT: 習慣／HON: 敬称／INCL: 包括／IPFV: 不完了／LOC: 位格／MDL: モダリティ／MOD: モーダル／MOM: 瞬間／NEG: 否定／NOM: 主格／OPT: 希求法／PFV: 完了／PL: 複数／PLN: 地名／POSS: 所有者人称／PP: 物主代名詞／PREP: 準備／PRN: 代名詞／PRS: 現在／PSN: 人名／PST: 過去／Q: 疑問／REFL: 再帰／SG: 単数／VN: 形動詞

参考文献

服部四郎. 1986. 「蒙古文語の不規則動詞 bükü」『服部四郎論文集：アルタイ諸言語の研究 II』pp. 180-201. 東京: 三省堂.

一ノ瀬恵. 1988. 「モンゴル語の人称関係小辞」『日本モンゴル学会紀要』19. pp. 15-29.

Ičinose, Megümi. 1988. Mongγul kelen-ü γurban bey_e qamiyataγulqu sula üge-yin kögǰil qubiral bolun tegün-i ončuγui-ber kereglеǰü baiγ_a bayidal-un tuqai. (モンゴル語の人称関係小辞の発展・変化とその特殊用法について) *Öbür Mongγul-un Yeke Suryaγuli-yin Erdem Sinǰilegen-ü Sedkül.* (『内蒙古大学学報』) 1988 年第 3 期. pp. 27-53.

Janhunen, Juha. 2003. Khamnigan Mongolian. In: Juha Janhunen ed. *The Mongolic Languages*. pp. 83-101. London and New York: Routledge.

風間伸次郎. 2001. 「ツングース諸語における譲渡可能を示す接辞について」In: 津曲敏郎編.『環北太平洋の言語』7. pp. 141-156. 吹田: 大阪学院大学情報学部.

小林高四郎. 1954. 『元朝秘史の研究』（ユーラシヤ学会叢刊 2）東京: 日本学術振興会.

栗林均・確精扎布編. 2001. 『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（東北大学東北アジア研究センター叢書 4）仙台: 東北大学東北アジア研究センター.

Ligeti, Louis ed. 1971. *Historie Secrète des Monogols. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta 1)*. Budapest, Akadèmiai Kiadò.

Nichols, Johanna. 1986. Head-marking and Dependent-marking Grammar. *Language*. 62(1). pp. 56-119.

----. 1988. On Alienable and Inalienable Possession. In: William Shipley ed. *In Honor of Mary Haas: From the Haas Festival Conference on Native American Linguistics*. pp. 557-609. Berlin: Mouton de Gruyter.

小澤重男. 1993. 『元朝秘史蒙古語文法講義』東京: 風間書房.

----. 1994. 『元朝秘史』東京: 岩波書店.

---- (小沢重男). 1997. 『蒙古語文語文法講義』東京: 大学書林.

----訳. 1997a. 『元朝秘史（上）』東京: 岩波書店.

----訳. 1997b. 『元朝秘史（下）』東京: 岩波書店.

Rybatzki, Volker. 2003. Middle Mongol. In: Juha Janhunen ed. *The Mongolic Languages*. pp. 57-82. London and New York: Routledge.

Sanders, Alan J. K. and Jantsangiin Bat-Ireedüi. 1999. *Colloquial Mongolian*. London and New York: Routledge.

Sunik, O. P. 1947. O Kategorii Otchuzhdaemoi Neotchuzhdaemoi Prinadlezhnosti v Tunguso-manchzhurskix Jazykax. *Izvestija AN SSSR, Otdelenie Literatury i Jazyka*. tom 6/vyp 5. pp. 437-451.

津曲敏郎. 1992. 「所有構造と譲渡可能性 : ツングース語と近隣の言語」In: 宮岡伯人編.『北の言語：類型と歴史』pp. 261-278. 東京: 三省堂.

角田太作. 1992. 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版.

Tsunoda, Tasaku. 1995. Possession Cline in Japanese and Other Languages. In: Hilary Chappell ed. *The Grammar of Inalienability (Empirical Approaches to Language Typology 14)*. part 2. pp. 565-630. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

山越康裕. 2006. 「シネヘン・ブリヤート語テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」In: 津曲敏郎編.『環北太平洋の言語』13. pp. 139-180. 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.

----. 2007. 「ハムニガン・モンゴル語テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」In: 津曲敏郎編.『環北太平洋の言語』14. pp. 119-157. 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.

----. 2010. 「ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語の所有構造：周辺言語の影響とみられる特徴について」In: 呉人惠編.『環北太平洋の言語』15. pp. 101-116. 富山: 富山大学人文学部.

Yamakoshi, Yasuhiro. 2012. Xamnigan Mongol xelnij ezemshigch ilru'u'lex arga (How to indicate the possessor in Khamnigan Mongolian). In: To'mo'rtogoo et al. eds. *Olon Ulsyn Mongolch Erdemtdijn Ix Xurlyn Iltgelu'u'd (Proceedings of the 10th International Congress of Mongolists). II bot': Mongol xel, Sojolyn tulgamdsan asuudluud (Volume II: Mongolian language and culture and their urgent problems)*. pp. 277-284. Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies.

Personal Pronoun Genitives in *The Secret History of the Mongols*
in Relation to Alienability in Khamnigan Mongolian

Yasuhiro YAMAKOSHI

This article observes the distribution of the three types of possessive NP structures used with personal pronouns in *The Secret History of the Mongols* written in Middle Mongolian (Mongolic, spoken in the 13th - early 15th century), and examines the functions of the three types in terms of alienability. The three types of possessive NP structures are as follows: a. preposed-pronoun genitive type [Personal pronoun-GEN #Head noun]; b. postposed-pronoun genitive type [Head noun#Personal pronoun -GEN]; and c. double-genitive type [Possessor-GEN#Head noun#Personal pronoun -GEN].

We observe the following tendencies:

1) The postposed pronoun genitive type (including the double-genitive type) is more frequently used than the preposed type.
2) The postposed and preposed types are not complementary in terms of alienability.
3) When the possessor is the first or second person, the postposed type tends to be used for more inalienable NPs. However, the preposed type can also be employed for some inalienable NPs (e.g., those denoting body parts).
4) When the possessor is neither the first nor the second person, the double-marking type (specifically, [Possessor-GEN#Head noun#3rd person-GEN]) is used only for more inalienable NPs.

Yamakoshi (2012) mentions that it is only in Khamnigan Mongolian among modern Mongolic languages, that personal possessive particles, which are grammaticalized forms of Middle Mongolian postposed-pronoun genitives, function as ‘inalienable’ markers. Given the results of this paper shown above, however, it can be argued that Khamnigan Mongolian possessive particles gained the status of inalienable markers after the Middle Mongolian period due to the influence of Evenki, one of the Tungusic languages.

（やまこし・やすひろ　yamyasuhiro@gmail.com）